

## 卷 頭 言



## ゲノム時代を迎えて

東京薬科大学 生命科学部学部長

工 藤 佳 久

ヒトゲノム解析が思いの外早く終わった。さて次はその医学や薬学への応用だと新聞を始めとするマスコミはすぐそこに新しい医学の世界が迫っているかのように騒ぎ立てる。それを真に受ける人々が癌も、惚けも、あらゆる難病もゲノム情報を利用すれば近いうちに治療できるようになると期待する。もちろん可能性は十分にあるが、実現にはまだまだ大きな壁があり、期待されるほどの実効が挙がるのはかなり先のことになるであろう。一方、これだけ新しいゲノム研究に期待するマスコミも一般の人々もゲノム情報を利用した遺伝子組み換えトウモロコシや大豆には、冷静に個々の組み換え作物についての問題点を論議するプロセスを飛び越して、異常に反応し、まるで毒を食わされているかのような扱いである。歴史的に見ても新しい発明や発見に対する過剰な期待や過信が思わぬ不幸を産んできたことは確かであるが、同時に、積極的に新技術を応用する冒険も科学の発達には必要である。しかし、ことゲノムに関してはこれまでの発見や発明とは異なった側面をもっている。現存の生命体は何億年間にくみ上げられてきた設計図を基に作られた表現形であり、どれもが地球の自然が育んできた壮大な歴史の産物として不可触の聖域とも考えられるからである。この設計図を改変することが可能になったことは確かにこれまでの人類の知的業績の内でも特筆すべき成果ではあるが、そんなに簡単にこの技術を使ってよいのだろうか。すでに分子生物学的研究は遺伝子の発現をコントロールすることによって、新しい発見を次々発表している。そして、すでに実験動物の範囲からヒトを対象にした研究に発展しつつある。どの研究機関も生命倫理規定に則って、研究が進められているはずである。しかし、人間は浅はかで愚かな動物である。それができるとなると、倫理も道徳もわきまえない無謀な科学者が信じられない冒険をしてしまう。物理学の発展が原子爆弾を作ってしまったし、化学の発達が発射力の大きな強力火薬や毒ガスなどの兵器も作ってきた。生命科学も決してこれらの例外ではない。その恩恵の裏に潜む生物兵器への発展の恐れはすでに指摘されている。ゲノム時代を迎えた今、医学を始め多くの生命科学に従事する者は確かな知識を裏付けにして、ゲノム関連研究の進捗を監視する必要がある。医学を信じ生命科学に期待をかける人々が中途半端なマスコミに扇動されたり、誘導されたりすることがないように、時にはその有意性を語り、時には危機を叫び、問題を指摘し続けることが必要であると考える。

略歴

工藤佳久

(KUDO, Yoshihisa)

東京薬科大学・生命科学部学部長

昭和 39 年 名古屋市立大学薬学部卒業

昭和 47 年 名古屋市立大学薬学部助教授

昭和 53 年 三菱化学生命科学研究所 主任研究員

昭和 55 年 三菱化学生命科学研究所薬理学研究室 室長

昭和 57 年 三菱化学生命科学研究所脳神経薬理学研究室 室長

平成 2 年 三菱化学生命科学研究所脳神経科学部 部長

平成 7 年 東京薬科大学生命科学部 教授

平成 12 年 東京薬科大学生命科学部 学部長